

■(逸見)狩野一信 絵師。仏画に本領を發揮、妖しさ漂わず独特の画風で、増上寺に全100幅の大作「五百羅漢図」。

かのうかずのぶ

伊能測量終・1816＝ 江戸本所林町で、骨董商の次男に生まれる。通称豊次郎。

水野忠成老中1818＝ 2歳：

異国船打払令1825＝ 9歳：

幼少から絵を好んだらしく、父の勧めで堤派の絵師堤等琳（3代目）を師匠としたと思われる。また、栗研堀に住む狩野直信にも学んで、その幼名を受けて一信と名乗るようになり、更に軽妙洒脱な画風で「素川風」と評された表絵師浅草猿屋町代地狩野家に弟子入りしたという説もあって、狩野一信とされているが、作品に狩野と署名されたものが無く、作風も狩野派と通じるものがないことから、後述の逸見一信とするのが正しいとも言われている。

若い頃から老成の風があり、周囲には少々変わり者と映っていて、兄としばしば争いを起こしたため、

高島砲術・・・1834＝18歳：

・・・1836＝20歳：正月元旦に家を出る。両国米沢町源兵衛方に仮寓するうち、
大塩平八郎乱1837＝21歳：

勸進帳初演・1840＝24歳：出入りしていた相模国大山石尊出身の御傍師で易者でもあった逸見舎人と出会い、一目で大望を抱く異相があるとして気に入られ、その娘やす（のち妙安と名乗る）と結婚し、逸見家に婿入りするが、今度は義母との折り合いが悪く、逸見家を出てしまう。

順天堂始・・・1843＝27歳：

父の許しもあって後を追ってついてきた妻と共に江戸各地を転々としながら、看板や提灯の絵を描いて糊口をしのぎ、浅草に住んでいた時は、近くの柴田是真とも交流したという。

阿部正弘首座1845＝29歳：

・・・1847＝31歳：現在知られる最初の作品で巨大な絵馬「五条橋の牛若丸弁慶図扁額」、

国定忠治磔・1850＝34歳：この年に増上寺子院源興院10世となり画家らを支援する了螢上人の知遇を得たらしく、

万次郎帰国・1852＝36歳：

ペリー来航・1853＝37歳：*重要な作品「源平合戦図屏風」(裏には「龍虎図屏風」)。この年、了螢が「五百羅漢図」制作を発願したのを受けて制作に着手。

開国開港・・・1854＝38歳：了螢は病のため源興院を退き、まもなく死去したが、後継の慎誉亮迪上人が「五百羅漢図」事業も受け継ぎ、制作資金3000両を用意する。

安政大地震・1855＝39歳：*「東照大権現像」。大火で、夫妻は全財産を失ってしまい、源興院に身を寄せ、さらに、「五百羅漢図」制作に専心するため、上人の後援により、芝浜松町に住居を定めたい。そして、一信は亮迪と同行して、鎌倉光明寺・円覚寺・建長寺の羅漢図を拝観し、本所羅漢寺の松雲元慶策五百羅漢像(のち目黒の羅漢寺に移転)からは強い刺激を受け一方、増上寺の学侶鶴飼徹定や沙門大雲・日野靈瑞に細かく指導を受けてながら、制作を進めて行く。「五百羅漢図」には、この年の大地震による被害の様を彷彿とさせる一幅があり、

松下村塾・・・1856＝40歳：成田山新勝寺のものと本堂の天井画「雲龍図」「天女図」、またこの前後に、障壁画「十六羅漢図」。この年、猛烈な台風が江戸を襲った様も「五百羅漢図」の一幅になっているように、大災害のみならず社会情勢も不穏なままに地獄を体験するような時代でもあって、これを浄化するべく逆説的に強烈な表現をしたともいえる。大覚寺から法橋位を授かり、それまでは「願幽齋」と号していたが、以後、「一信」の号を用い始め、

蕃書調所・・・1857＝41歳：この年刊行の「安巳新撰文苑人名録」に画家逸見一信として記載される。この間、京都清涼寺に「五百羅漢図」の下絵の一部を奉納しているが、一信が墨描きしたものに妻妙安が淡彩を施している。

安政の大獄・1859＝43歳：「大黒舞図」、この画に賛している福田群は幕末の異才の出版人福田敬業で、2年前に本所羅漢寺近くに書店を開いたことから、親交があったらしく、西洋画法についての情報源にもなっていたと考えられる。

桜田門外変・1860＝44歳：

遣欧使節・・・1861＝45歳：この年刊行の「江戸現在公益諸家人名録」にも画家逸見一信として記載される。

生麦事件・・・1862＝46歳：法眼位を得ているが、公儀の絵師を務めた形跡がないことから、大覚寺の末寺たる成田山新勝寺さらには了螢上人の関与があったと想定される。

8月18日政変 1863＝47歳：*多年に渡る大作の制作でうつ病にかかり、「五百羅漢図」完成間近に、没した。

年末に妙安は96幅を増上寺に納め、翌年明に開眼供養が行われた。子供がなかったため、門人の一人一純が養子となって逸見家を継ぎ、残り四幅を制作して完成させた。また、皇室から国立博物館に下げ渡された「五百羅漢図」はサイズが半分で50幅のものであるが、これも一信が増上寺の「五百羅漢図」を手伝っていた妙安と一純によって完成させられたものと思われる。妙安は、明治初期の廃仏毀釈にさらされても「五百羅漢図」を守りぬき、1878年に羅漢を安置するため、増上寺内に自ら尽力して建立した羅漢堂の堂主となった。洋画家の黒田清輝は、洋行中に一信のことを尋ねられて答えに窮したため、帰国後一信の事績を調べて、羅漢堂も訪れ妙安にも会い、その画技に感嘆したという。